



丹波育児院

～辻原光治とその周辺の人々～

第17回

近藤亮太郎

丹波教会創立に参加した近藤亮太郎（？～一八九八）は、岡山医学校在学中に入信し、明治二八年に帰郷して開業、松山会堂建築のために自らの土地を提供するなど、辻原光治らとともに松山部の中心として活躍し、三一年に早逝した人物です。

亮太郎は養子でした。養家近藤家は代々旗本柴田氏の代官をつとめ、古くから医業も営んでいました。養父環は、天保十四年（一八四三）橋爪生まれ、少壮時に篠山で医学を修得し、郡会議員や府会議員を務め、明治二二年からは初代松山村長となっています。（『現代船井郡人物史』）。

亮太郎の実父母や生年は確認できていませんが、若年で養子に入り、医師となつて家業を継ぐべく養育され、岡山へ赴いたのでしょ

う。岡山へ赴いたのでしょ

岡山医学校

岡山医学校は、岡山藩の医学館を源流とし、明治十三年（一八八〇）に岡山県医学校と改称され、その後変遷を経て現在の岡山大学医学部へつながります。当時は「西日本随一の医学校」（森有礼文部大臣）と評されました。近藤の卒業時は第三高等学校医学部と称されていましたが、本稿では「岡山医学校」と総称します。

近藤が入学したのは何年か、はっきりしませんが、卒業したのは明治二五年（一八九二）で、同年の卒業生五人中に名前があります。（『岡山医学会雑誌』三五号）。当時医学校（医学部）の修業年限は四年でしたから、

逆算すると二一年入学ということとなります。しかし、それでは丹波教会設立（十七年）以前に「岡山医学校在学中に入信」というのと整合しません。当時の入学資格は「十八歳以上で初等中学校卒かそれと同等の学力を有する者」でした。同校には予備校部門も併設されていましたが予備校で学んでいたのかもしれませんが。

あるいは、同校の教育は非常に厳しく、入学よりも卒業が難しかったといわれていますから（井原医師会ホームページ）、卒業までに四年以上かかった可能性もあります。ちなみに岡山孤児院の創設者・石井十次も同校出身ですが、石井は進級試験に失敗し八年に渡って在籍し続け、最後は中退しています。

岡山教会

『丹波基督教会史』には「明治二七年三月四日、近藤亮太郎氏岡山教会より転入」とありますから、岡山教会に於いて入信していたことは間違いのないでしょう。岡山教会は、十三年（一八八〇年）十月に新島襄の司式により設立されました。この教会は何かと丹波と縁がありました。

初代牧師の金森通倫は同志社出身で、初期の丹波教会へ何度も足を運んでおり、須知の谷平吉と前田英吉は金森から洗礼を受けました。留岡幸助を北海道へ紹介したことや政治家石破茂が金森のひ孫に当たることなどは前述しました。金森は一八年九月まで岡山教会牧師でしたから、近藤が受洗したのも金森からだっただろう

うと推測されます。

石井十次も金森から岡山教会で受洗しています。その石井の岡山孤児院こそ、後に辻原が孤児院を創業する機縁となったのです。

金森の後任牧師となったのは安部磯雄（一八六五～一九四九）で、安部も同志社の学生時代に井上半介の発蒙館に長期滞在するなど、丹波とは少なくない関わりがありました。

休暇中家族友人に伝道

松山地方へのキリスト教布教は、休暇で帰省した近藤が家族や友人に伝道したのが最初だろうといわれています（『開拓者と使徒たち』）。

明治二二年七月八月には松山、保井谷、豊田で留岡幸助牧師、村上太五平伝道師らにより集中的な説教会が開かれています（『丹波

基督教会史』）、その中に夏季休暇中の近藤の姿もあったと思われれます。また、この説教会は、松山役場書記になつて間もない時期の友金（辻原）光治がキリスト教に出会う機会にもなったのではないかと思われれます。

二三年一月十二日には「近藤環氏母堂きし女永眠葬式を行う、説教者留岡幸助牧師」とあり（同前）、この時点で近藤の家族もキリスト教に入信もしくは接近していたことがわかります。二五年正月には元旦から十七日にかけて松山や豊田で連日のように祈禱会が開かれ、元旦と三日には近藤が「司会勧話」を行い、他の日は主に友金光治がつとめています。近藤は十二日に「当地ヲ発シテ岡山ニ帰」っています（同前）。

卒業・結婚、帰郷・開業

近藤の卒業式は、二五年十一月十七日の十時から十一時半まで岡山市天瀬明修館で行われました。しかし、奇妙なことに『丹波基督教会史』には、まったく同じ日に「檜山近藤亮太郎氏、山村小千代女と結婚式を挙げ、司式松井、村上両師」とあります。岡山での卒業式と丹波で（？）の結婚式が同日だったとは考えにくいですが、いずれにせよ慶事が続いたのでしょう。妻小千代について詳細はわかりません。

近藤は卒業後すぐには帰郷せず、『岡山医学会雑誌』四十号（二六年五月）によれば「今般京都なる東山医院に出勤」しました。ただ二七年三月には岡山教会から丹波教会へ籍を移していま

すので、この時期に松山へ帰ったのかもしれませんが。二八年六月には「船井郡医」に任用されています（同誌六五号）。

松山会堂建築、早逝

このころ松山での集会はもっぱら中川道之助宅が会場でしたが、会堂を建設することが早くからの課題でした。前にも述べましたが、二五年六月二六日の集会で友金光治が呼びかけて会堂建築のために共同貯金をする決議がなされました。毎月金二銭以上を五か年間続ける計画で、友金のほか、中川道之助・りう、猪奥勇吉、太田栄之助、沢田庄六・むめ・いかが署名しています。

会堂は近藤から用地の寄付を受け、計画より早く二八年十月十三日に落成しました。同日、松井文弥牧師、

ゴルドン教師ら百余名の参会を得て捧堂式を開催、近藤が経過報告に立ちました。しかしそのわずか三年後、三一年十二月八日、近藤は永眠します。死因は不詳です。十一日に谷平吉司会、村上太五平説教により葬儀が行われました。後継者の早逝は近藤家にとつても大痛恨事だったでしょう。養父環はその八年後、三九年三月に逝去しています。

近藤は医師としても研究熱心で、『岡山医学会雑誌』には「逍遙肝患者ノ実験」と題する論文や「クアツプレウスキー『喀痰の結核菌検査』』という翻訳（五回）を投稿していました。

死後、同誌は「有為の才を懐きて空しく長逝せられたりと、嗚呼惜むべし」と追悼しました。（山下幾雄）